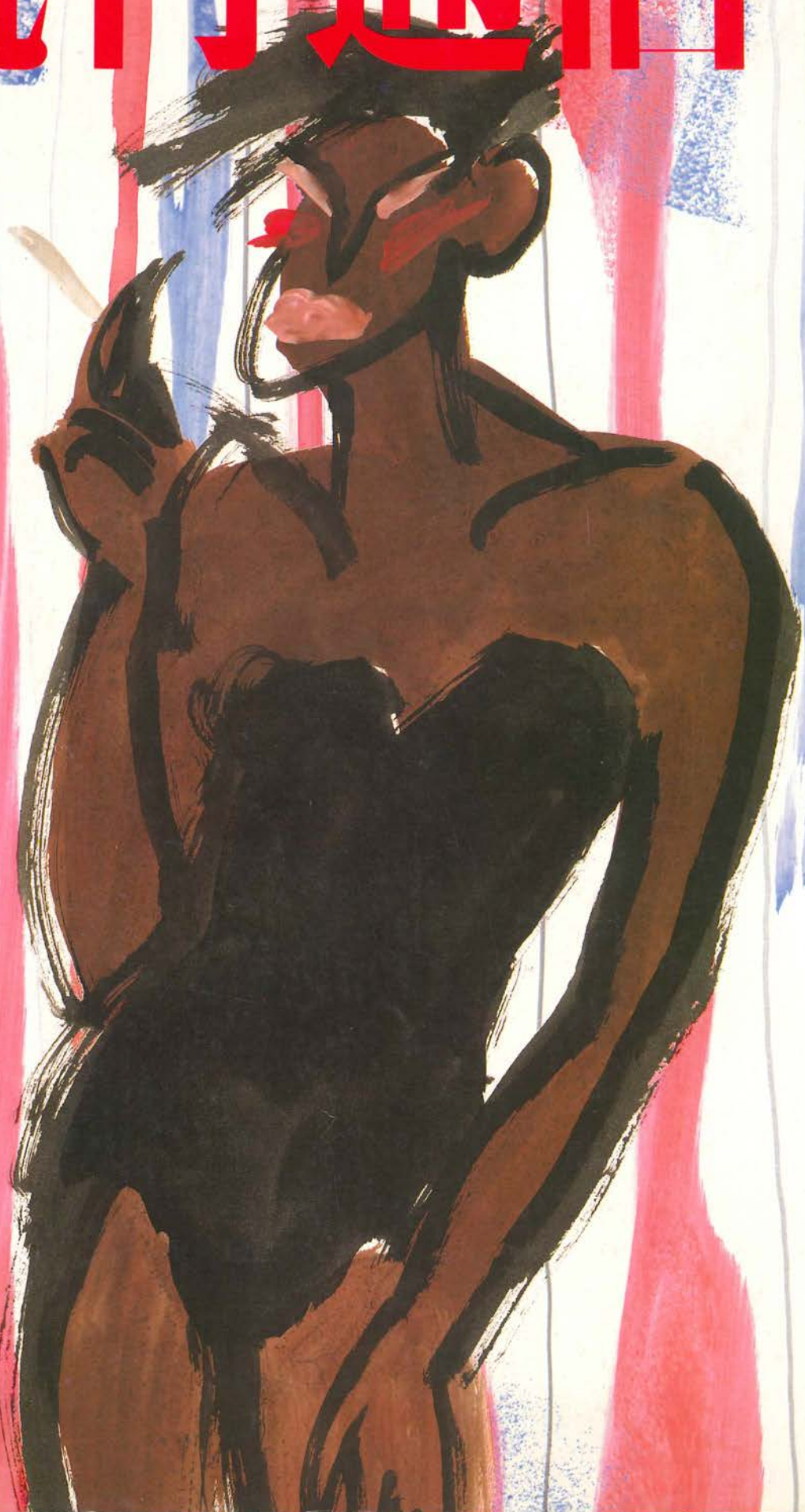


7月号 昭和59年7月1日発行 毎月1回1日発行 昭和51年2月14日 第3種郵便物認可 昭和58年3月22日国鉄首都特別扱承認誌第6778号

流行通信

No.246
RYUKO TSUSHIN
7



特別発信 Visual Message
第七回 杉山恒太郎
「ほうほうあたま」

C O N T E N T S

表紙イラストレーション／宮本静江

特別発信 VISUAL MESSAGE 第7回

〔ぼうぼう頭〕—— 18

発信者：杉山恒太郎 撮影：漆畑銑治

FASHION

まいごの天使 (Last Summer Resort)

写真：半田也寸志 —— 56

からだの文法 (水着ヴァリエーション) 写真：吉村則人 —— 69

その、砂の果て (夏のサファリ) 写真：マイケル・ハルスバンド —— 75

新連載 (ファッション・エディターがフォト・ワークに挑戦)

Editor's Eye 第1回 キュロット・ドレスのヴァリエーション —— 84

ILLUSTRATION THEATER

Face to Face イラスト、写真：トニー・ヴィラモンテス —— 90

FLASH ON "glass" 「封じこめられた光と風」 写真：中村彰三 —— 98

ARTICLES

People ①〔アンドレー・プットマン〕 インタヴューアール：エベ・ドーセ —— 106

People ②〔残間里江子〕 インタヴューアール：征木高司 —— 108

Extraction (第16回)

「テレビ文化から飛び出たアン・マグネソン」 文：勅使河原季里 —— 111

「ピカソ・ラスト・イヤーズ」 文：深谷哲夫 —— 112

「ベッドで夢見る奇妙な悪意」 文：生井英考 —— 113

「女流彫刻家カミーユ・クローデルの作品と生涯」 文：村上新子 —— 114

「ドリーム・タイム」を浮上させるイメージ・ジャンクル」 文：伊藤俊治 ——

ライヴ・アート・イン・NY (第7回)

「キネマティックの夢と幻想」 文：大竹秀子 —— 116

特別企画「クセナキスの夢」(ディスコグラフィ) 文：近藤 譲 —— 118

NOVEL

「解放されるトマーゾ」(連載第1回) 作：荒俣 宏 絵：門坂 流 —— 122

JOURNAL

「フィルムのく語り」・小説のく語り」 文：由良君美 —— 43

「シェイクスピアを通じて」 文：中野春夫 —— 44

「童話作家に必要な毒の量」 文：稲垣美晴 —— 45

「日本美術界のネクラなマイナー感覚はいつ消えるのか」 文：伊東順二 —— 46

「東京の蜃気楼」 文：如月小春 —— 47

「宇宙を食べたい」 文：大宮信光 —— 48

「万華鏡の中の……」 文：浜本 薫 —— 49

「都市の落書き」 文：粉川哲夫 —— 50

OTHERS

Information Bureau (最新アート、ミュージック情報など) —— 127

Fashion Topics (新製品紹介、読者プレゼントなど) —— 139

GUIDE BOARD (取材協力店リスト、編集後記ほか) —— 176

流行通信

No.246 JULY 1984

AD —— 長友啓典

デザイン —— 野村高志、漆畑一己、高橋雅之+K②

流行通信制作室 (清水正己、石田千尋)

撮影：山崎邦彦

©流行通信 (毎月1日発行) 発行人・森賢
昭和59年7月1日発行 発行所・株式会社流行通信
〒162 東京都新宿区市ヶ谷本村町6-1 電話・03-235-0901~2 (編集部直通)
印刷所・大日本印刷株式会社 ●本誌掲載の写真、イラストおよび記事の無断転載を禁じます

都市の落書き

粉川哲夫

落書きは都市の政治表現である——などということをも新たな発見でもあつかうように語れるとしたら、それはわたしたちがよほど「平和」な時代に生きていたのである。乱世には必ず落書きが活気づいたし、ロバート・ライズナーが『落書き——壁書の二千年』のなかで示しているように、落書きの政治史は昨日や今日のものではない。そして、どんな時代にも都市には政治的な落書きを見出すことができるし、どんなに「非政治的」な落書きでも、都市のさまざまな表現——広告、事件、生活——全体との関連のなかではきわめて政治的な意味をもっている。

アメリカでは、都市の落書きが活気づき、ピークに達したのは、一九七〇年代のはじめだった。いまでは、キース・ヘリングやドンディ・ホワイトのようなスターまであらわれ、「フリーディ・アート」や「ヒップ・ホップ・アート」として芸術の仲間入りしてしまったニューヨークの地下鉄の落書きも、当時は、都市のさまざまな落書きのなかの一つのスタイルだった。

その意味では、七〇年代というのは、少なくともニューヨークでは、そうした多様で、露骨に政治的でもあった落書きが、次第に街頭から姿を消し、地下鉄のなかに閉じこめられてしまうプロセスだった。これはいかにニューヨークらしいことだ。ニューヨークは、アメリカの人工的な「解放区」であり、他の都市では許されないことを大目に見ることによって、アメリカ全体のバランスを保つ

のである。だから、ニューヨークでどんなに「アナキー」に、あるいは「グレイジー」に見えることも、あらかじめ安全装置をはめられているのであり、それが起爆力になって既存のシステムや秩序を壊してしまうなどということはない。地下鉄の落書きがアートになってしまったのは、まさにその典型的な例である。

しかし、イリヤ・プリゴジヌの「散逸構造」論でも応用したかのような、かくも巧妙な管理に支配されたニューヨークでも、耳目をひく大事件が起こると、街には鋭い表現の落書きが出現する。一九七八年にガイアナでジム・ジョーンズに率いられる宗教集団「ピープルズ・テンプル」の九〇〇人以上の信者が不可解な集団自殺をとげたとき、わたしは事件の翌日、ニューヨーク大学に近いブロードウェイの或る建物の壁に「CIAは、ピープルズ・テンプルの九〇〇人の人々を巧妙に始末した」と記された落書きを目にした。落書きにおけるこうした敏感な反応は、地下鉄の落書きが、露骨な意味での政治性を失い、単に子供っぽいだけのアートになってしまったあとでも、目立たない街角では生きており、今後も生き続けるにちがいない。

が、落書きが都市の政治表現であるという点では、イタリアの諸都市は、依然としてその方向を失っていない。七〇年代にミラノ、パドバ、ポローニヤ、ローマなどの都市で吹き荒れたアナキックな運動のさなかには、街のいたるところにペンキやスプレーの赤い文字が書かれた。それは、単なるメッセージではなく、

学校やファシスト系の新聞のような文化的権威、銀行や大企業のような経済的権力への挑戦であり、ときにはそれがエスカレートして、単にそれらの建物の壁をスプレーするだけでなく、爆破してしまふところまで進んだ。その結果は、一九七九年四月以降、権力の猛反撃をもたらした。破壊的な活動に加わらなかった活動家までが逮捕され、現在その数は四〇〇〇人におよぶという事態に至るのである。

かつて大きな集會が開かれた広場にはことごとく監視用のテレビ・カメラが設置され、いわば日常的な戒厳令下にあるパドバには、七〇年代に書かれた落書きがまだそのまゝの形で残っている。「自律的な労働者」と自ら名をのけることが、組織に属す以前に人々を連帯させたのが七〇年代のこの運動——アウトノミア運動——の特徴だが、それを支持する人が多かったパドバの街では、「アウトノミア」の落書きを消したり、書き変えたりするのは、ファシストだけなのである。

不可能だ。それは、まさに洗い流されたのであり、うえから白や黒のペンキをかぶせて隠蔽されたのである。

ローマにはまだ七〇年代の落書きが残っているだけでなく、落書きという政治行為が横行されているらしいのを発見したのは、ローマに着いてすぐだった。ローマ駅の近くの通りで、「コムニニスムは生きています。アウトノミア・オペライオ」と赤字で書かれている落書きの「生きています」という部分が黒字で「死んだ」と書きなおされているのを見つけ、しばらく歩いたところで、今度は、黒字で書かれたらしい文字のうえに白いスプレーをかけ、そこに赤字で「ファシストくたばれ」と書いてあるのに出会った。ここにはまさに建物の石壁が熾烈な闘争場になっているのであり、そうした闘いが続いているということが、ローマという都市の現状を物語っているように思われた。

そんなわけで、わたしは、歴史的建造物の内部で名高い美術品をながめることなく、もっぱらその外部を——しかもその壁面の落書きだけを見てまわることになってしまったが、おかげでわたしは、イタリアの骨董品と化した過去にはなく、依然として現在を支配し、いつの日か新たなものを起爆させようとしている生ける過去に接することができたような気がした。そして、そういえば、日本のタテカンも落書きの一種だったが、それが街のビルや壁のうえにはなく、キャンパスの、しかもいつでも破壊できる板のうえに書かれたことに表現としての限界があったのだと考えるのだった。

写真／筆者(2点とも)



「労働の自律」と書かれたローマ駅近郊のサン・ロレンゾ地区の壁



「ファシストくたばれ」。右翼の落書きをスプレーで消しの上で赤字で書かれている(ローマ市内)